
とある男の旅物語

幻想晃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある男の旅物語

【Nコード】

N0676H

【作者名】

幻想晃

【あらすじ】

ライラ村に住む少年、レンが釣りに出掛けたときに見つけたのは、一人の少年と巨大な剣だった・・・。

第一章

これは、暗く広がる宇宙に浮かぶ、【日本】と呼ばれる星の、物語である。

とある男の旅物語

第一章

『始』

広い草原を一人の少年が走っていた。

Tシャツに短いズボンという、いかにもな格好で。

少年の名は、レン＝リードマン。彼は、自分の住むライラ村の人々のために、山で狩りをしていた。そして一頭の小鹿を捕まえ、村に向かっていった。

村に着くと、彼は自分の家に駆け込んだ。扉代わりに造られた、藁ののれんをくぐり、机に獲物を置き、

「母さん！また一匹捕まえてきたよ！」

その声に、少年に背を向けるように椅子に座っていた女性が立ち上がった。

「あら、今度は少し大きいのね」

母親は、自らの子供が捕えてきた獲物の大きさに、素直な意見を述べた。

「うん！今日は鹿を見つけても、大きいを見つかるまでほっとしていたんだよ！」

自慢気に胸を張る息子に満足そうに頷いてから、真剣な顔でしゃがんで少年と視線を合わせる。

「レン。これは確かにすごいことだけど、狩りならお父さんが行ってるし、家畜だっているじゃない。あなたが狩りをする必要はないのよ」

彼女の顔付きは真剣で、それでいて我が子を心配するような、母親の顔だった。

「僕、早く大人になって、おつきい仕事について、父さんと母さんにいっぱい食べさせて、喜ばせたいんだ。でも、今はまだ子供だから、これくらいしかしてあげられなくて・・・」

対する少年もまた、両親を大切に想う、立派な子だった。

その言葉に母親は自分の瞳から熱いものが溢れそうになるのを抑えながら、優しく笑う。

「ありがとう。でもね、母さんはあなたがいるだけで幸せなのよ。こんなことしなくなったら」

「駄目だよ」

母親の言葉を遮り、少年は言う。

「これだけじゃ、足りないんだ・・・これだけじゃ、まだあいつらに渡す分にはならない。そしたらまた、父さんの獲ってきた獲物や、家畜が、村のみんなの食べ物盗られちゃうんだ。これだけじゃ、

足りないんだよ」

「レン・・・」

少年の真剣な、そして悲しそうな表情に、母親は言葉を失くした。「じゃあ、今度は魚をとってくるよ！」

レンは、沈黙を打ち破り、玄関に立て掛けてあった釣りざおとバケツを手に家を飛び出していった。

「ちよつとレン、待ちなさい！」

すでに家を離れたレンには、母親の声は届かなかった。

木の壁によつて創られた天然の道を抜けると、空に染められた青い海と白い砂浜が視界を覆い尽くした。

すでに何回も訪れ、見慣れている景色だったが、あまりの美しさに少年は目を輝かせた。

しばらく見とれていたレンだったが、本来の目的を思いだし、我に帰る。

「じゃあまず、」

体が覚えている場所にレンは向かう。

そこには、何百年も石が積もり、さらに何万年と波に打たれて一体化した大きな石で創られた天然の足場があった。その先端には、そこだけ石が多めに積もったのか、少し尖っていた。

その石に登るために創られたとしか思えない、大中小の石が順に置かれてできた階段を登って、大きな石の上にたどり着く。

そして、石の端の尖った部分に縄でくくりつけられた、長い木の棒を引っ張る。すると、長い木の棒の先端にくくりつけられた、網でできたかごが姿を現す。

かごの中には、小魚がたくさん入っていた。レンは小魚をバケツに移し、木の棒をかごと落とした。木の棒は、1mほど落ちると、くくりつけられた糸に引っ張られて停止した。

それを見届け、レンは石から飛び降り、浜辺から少し離れた場所に向かう。

少し走ったところに、木の陰に置いてある小舟を見つける。その小舟を海に流し、少し深いところまで行ったところで、小舟に飛び乗った。小舟の中にあつたバケツに水を汲んで、舟をこぎだす。さらに深いところまで来てから、レンは釣り針に小魚をつけて、海に放った。

「よし、後は待つだけだ」

レンは釣りざおを持ったまま、空を見上げる。

相変わらずの青い空。空気の清んでいるこの地域では、いつそう綺麗に見えた。

まるで、上の世界にもう一つ海が存在するのではないかかと思わせるほどに。その海に、白い雲がゆったりと流れている。

前に視線を移すと、一面に広がる大海原が見える。

どこまでいっても海が広がっている。この遙か先には、【日本】の王が住む王都がある。とてもこの小舟で行ける距離ではないが。

とその時、波が少し激しくなり、小魚を入れたバケツが倒れてしまった。

「ああっ！」

レンは小魚をバケツに戻そうと後ろを向いて、止まった。視界の隅に、何かが写った。それを確かめようとして、レンは顔を浜辺の何かに向ける。

そこには、

タキシードを着た十代後半ほどの少年が、1mを悠に超えた巨大な剣と一緒に打ち上げられていた。

「で、あの子は誰なんだい？」

レンの母親は、椅子に座っている我が子に訊く。

その後、レンは村に戻って大人たちに声をかけ、少年を村まで運んだ。その後この少年をどうするかという話になったが、レンの希望で、レンの家で預かることになった。少年は、今家のベッドに横になっている。意識は戻らないままだ。

「・・・わからない。釣りをしたら浜辺に打ち上げられているのを見つけたんだ」

「・・・」

母親には、レンが嘘をついているようにも見えなかったので、信じることにした。

しかし、この少年は一体・・・。

ここらでは見ない顔だし、最近旅人がやって来たというのも聞いていない。

十中八九海から流れてきていたので間違いないと思うが、だとしたらどこから流れてきたのか。一番近いところで、反対の大陸にこみを埋めるところがあるが、そこから流れてきたとしたら、この少年はかなりの間海の上にいたことになる。いや、タキシードを着ているし、船上パーティかなにかで、海に出ていた所に、何か事故があったのかもしれない。しかし、だとしたらなぜ剣をもっているのか。

「・・・ぐ。うう・・・」そんなことを考えていると、少年が目を覚ましたようだ。

レンもその声に反応し、ベッドの方に顔を向ける。

「気が付いた？」

レンの声に、少年は首を動かす。

「ここは……どこなんだ？」

少年は上半身を起こしながらレンに問いかける。

「ここはライラ村。岬大陸の端にある、小さな村さ」

その問いに、代わりに母親が答える。

「……ライラ村……？」

「あなたのことは、なんて呼べばいいの？」

「俺は……ルークス」

「ルークスね。よろしく、ルークス君。さっそくだけど、あなたは

何であそこにいたのかしら？」

「あそこ……？」

「浜辺に打ち上げられていたんだよ」

母親が答える前に、レンが言う。

「お前は……？」

「僕はレン。こっちが僕の母さん。よろしくね！」

「レン。母さんはこの人と話があるからレンは外で遊んでらっしゃ

い

にっこり笑うレンに、母親は優しく言う。

「僕も話聞きたいよ」

「後でいくらでも出来るから。ほら、早く」

母親は半ば無理矢理レンを外に行かせた後、ルークスと向き合う。

「で、あなたはなぜあそこにいたの？」

ルークスは少し困った顔をしてから、

「……わからない」

「わからない？」

母親はルークスの言葉をそのまま聞き返す。

「ああ……何も、何もわからない。憶えてないんだ」

「……なら、あなたがどこから来たのかもわからないの？」

「ああ」

「……」

彼の言っていることが本当なら、彼は記憶を失っている、ということだろう。なぜ海から流れてきたのかも、なぜタキシードを来ているのかも、なぜ剣を持っていたのかも。

「・・・そういえば」

母親は、壁に立て掛けてある、巨大な剣を示した。刃の部分には、包帯が巻いてあり、柄の部分しか見えない。

「あれはあなただよ。あれを見ても、なにも思い出さない？」

「・・・これは」

ルークスは剣に近寄り、それを軽々と持ち上げた。

その光景に、母親は驚きの表情を隠せなかった。あの剣は、大人の人が、四人でやっと持ち上げたものだからだ。

「何か、見覚えがあるな。じっくりくると言うか・・・」

そこへ、大人を四人ほど連れてきたレンが入ってきた。

「さっきの少年が起きたつてのは本当か!？」

「おお、本当だ!大丈夫だったか?」

「よしよし、客の歓迎の準備だ!」

驚くルークスを、四人の男たちは外へ連れ出した。

外には、今か今かと待っていた村人たちが歓迎の意を声で表した。

「おお、起きたか坊主!」

「怪我はしてない?」

「宴だ宴だー!」

大人たちは家から食糧や調理用具などを持ち出し、宴の準備を始めた。

何を言うことも出来ないルークスのタキシードの裾を、誰かが引っ張った。

振り向くと、そこには、レンが満面の笑みを浮かべていた。

「みんないい人たちだよ。今日は何にも考えず、楽しもうよ」

その無邪気な笑顔に、ルークスは逆らうことができなかった。

「・・・ああ、そうだな」

ルークスは優しく笑い、自らの歓迎会の準備を手伝い始めた。

「じゃあ、ホントに何も憶えてないのかい？」

「ああ。いや、食い物の食いかたとか言葉とかは分かるんだけどな」
「まあ、そんなことまで忘れられてちゃどうしようもねえからな！」
「がっはっは、と笑う男にルークスも釣られて笑った。」

ルークスは初めの内は話し方なども少し奇妙だったが、感覚を思い出してきたようで、今は村の子ども達を膝や頭の上に乗せながら会話をしている。

あれから、村は文字通りお祭り状態だった。

男たちは家から持ち出してきたであろう楽器を鳴らし、大声で歌っている。

他の女性たちもその歌声に重なるように柔らかい歌声を響かせ、優雅な踊りを踊っている。

彼らのルークスに対する警戒は、はじめから微塵も無かった。

ただ、久々の来客（多少特種な登場ではあったが）に、喜び、祝い、騒いでいる。

彼らの無邪気な、優しさの欠片などなく、例外無しに優しさだけでできた村人たちの心に、ルークスは何も感じなかった、と言えは嘘になる。どこるか、彼らの優しさに驚き、感心し、感動した。

まるで、ルークスが元々ここに住んでいた、古くからの仲間のよう
に接してくれる彼らの心に。

まるで、彼女のようにー

バチッ

と、頭の中で何かが弾けるような音がした。

「ッ！」

突然の出来事に、ルークスは思わず顔をしかめる。

「どうしたの？」

椅子に座ったルークスの膝の上に座っている男の子が、ルークスに心配そうな眼差しを向ける。

「いや、何でもない。大丈夫だよ。火の光がちょっと眩しくてな」
ルークスは心配をかけまいと、誤魔化すようにそう言った。

「何だ少年！火の光ごときを眩しいなんざ、それでも男かい！？」
前から聴こえたその声に、ルークスは顔を向けると、そこには筋骨隆々の上半身裸の男が立っていた。どうやら、昼から暗くなりきる今まで、ずっと宴の準備をしていたようだ。左手には、肉や野菜を串に刺した料理が三本ほど握られていた。

「そんなんじやこの村に住もうと思えば大変だな！」

特に客が来たときなんかはな！と豪快に笑う男に、

「えーっと・・・あんたは？」

と訊いた。

「おお、そっいや一回も顔会わしてなかったな！俺はゴウ＝リードマン。俺の息子がいなけりや、あんたは干からびて死んでたんだぜ」
「！」

どうやら、レンの父親らしい。言われてみれば、どこか同じものが感じられる。

「あんたがレンの父親か。よろしく。」

差し出した手を、ゴウは力強く握り返す。

「この村は、いつもこんなんなのか？」

「いや、前まではそうだったんだが、最近はあるたみたいな客が来たときだけだ。それもしばらくなかったけどな。あんたも今の内に楽しんどけよ」

そう笑うゴウの顔が、急に深刻な顔つきになる。

「こんなことができるのは、今日だけだからよ」

「……？」

二人（膝と頭を含めれば四人）のいる空間を沈黙が覆う。

だがそれも一瞬で、彼の顔はさっきまでの顔に戻る。

「ま、とにかく今日は楽しめや！そうだ、客を歓迎するときはいつもやってんだけどよ」

と、ゴウは円になって集まっている中心にある建物（盆踊りの櫓みたいな感じの）を指差す。

そこには、焚き火から起こる巨大な火と、その前に立つ準備体操のようなものをしている男の姿があった。

（どうやってたらあんなに火が強くなるんだ！？ていうかまさか、）
そう思った時には、男は雄叫びをあげながら、火に突っ込んでいた。直後、火だるまになった男が姿を現す。

男は、そのまま地面を転がり、他の村人に布などで、はたかれて消火した。

「……！！！！」

口が塞がらないルークスに、ゴウは自慢気に言う。

「俺らの村ではな、客が来たときは、その喜びをああやって表すんだ」

「なんて、斬新な表現方法……！ていうか斬新すぎるだろ！むしろ古いわ！ていうか火の光が怖いとこじゃ生きていけないってそういう意味か！？こりゃ確かに生きていけねえよ！！」

ルークスの記憶上、初めてのつつこみだった。

彼はその後、客の立場であるにも関わらず、何故か火に突っ込まれることになった。

光の眩しさで、ルークスは目を醒ました。

昨晚、ルークス含めほとんどの村人は騒ぎ疲れ外で眠っていた。最後まで起きていた者が後処理をしたのか、周りには昨晚騒いだような痕跡は全くと言っていいほど見つからなかった。いや、村人が（外にいる者限定で）全員起きているところを見ると、自分が寝ている間に片付けてしまったのかもしれない。自分のために準備してくれたものを、後片付けもせずに寝るとは、とっしだけ罪悪感を感じながらルークスはゆっくりと起き上がる。

「おう、起きたか」

それに気づいたようで、ゴウが声をかける。何やら木の箱を持っている。

「それ、何だ？」

ルークスが訊くと、ゴウは笑って、

「やつらに対抗する為の物さ」

「やつら？」

そういえば、昨日も何か気にかかるようなことを言っていた気がする。

「昨日もこんなことができるのは今日だけだーとか言ってたな。やつらって何だ？客がくるのは今日だけだから、っていう意味で言ったんじゃないみたいだな」

ゴウは苦笑し小声で「あっちゃー」と言いながら左手を額に当て

る。木の箱を右手だけで持ちながら。

「しようがねえ、あんたにも教えといてやるよ。この村にはな、毎月盗賊がやってくるんだ」

ゴウは隠していても無駄だと思ったのか、説明をはじめた。

「盗賊？」

「ああ。やつらのボスが、『ドーマン』っていうんだけどな。そいつがえらく強くてな。最初にやつらがやってきたときは俺らも対抗したんだが、あつという間に全滅させられてな」

「殺されなかったのか？」

「俺もやつ銃を見て殺す気だと思っただがな、腕や足を撃つだけで殺しはしなかった。その後やつはこう言った。『お前らを殺したら家畜を育てるやつらがいねえからな。せいぜいこきつかってやる』ってな。それを聞いたとき、俺は相当頭に来たんだが、勝てる相手じゃねえし、なにより下手すりゃガキどもまで殺されちゃうかもしれないねえからな。それからはいつも下僕の用にこの村で獲れた食糧を差し出しているんだよ」

「逃げなかったのか？」

一月毎に来るのなら、その間に逃げることも可能なはずだ。

「最初はそれも考えたが、やつらそれを見越して、村の出口に住処を作って俺たちが逃げ出さねえように監視してやがるんだ。ここは岬大陸の端っこだからな。どこかに行こうと思えば、一つしかない出口を通って行かないと駄目なわけだ。それができない俺達は、ただ家畜として奴らに従うしかねえってわけだ」

「・・・・・・・・」

でもな、とゴウがにやりと笑う。

「それも今日で終わりだ。俺達は奴らが去ってから奴らに対抗するため、武器を作り始めた。もちろん相手は銃だから、槍や剣なんて物じゃないものをな」

見てみる、とゴウは木箱の蓋を開ける。

覗き込むと、そこには頭に紐の付いた黒光りした大量の球体があ

った。

「これ、もしかして・・・」

爆弾だ。とゴウが言う。

「これを使えば銃を持っているやつらにも対抗できる」

「でもこれ、どうやって火点けるんだ？まさか全員火をもってやるのか？下手すりゃ爆発するんじゃない・・・」

「その辺の心配はいらねえ。これは特殊な薬を塗りこんでいてな、地面でも壁でもちよつとこすってやりゃあ簡単に火が点く。マツチみたいなもんだと思ってくれればいい」

「それでも、投げる前に撃たれたら終わりだろ。どこるか爆弾に弾が当たりでもしたらどうするんだ？」

その問いに、ゴウは少し顔を歪めて笑う。

「そんなときはそんなときだ。皆覚悟は出来てる。そうでもなきゃ対抗しようなんて考えねえよ」

彼らの覚悟が本物であることは、彼の眼を見ればすぐにわかった。この眼は、本気で死に行く眼だ。

「そうだ、あんたに言うておこうか」

ゴウはふと思い出したように言う。

「何だ？」

大体予想はついていたが、それを確認するように、訊く。その言葉に帰ってきたのは、

「もし俺たちに何かあったら、ガキどもを頼む」

「・・・」

「あんたは客だ。ここの村人じゃない。一緒に戦わせる気はねえし、どこるかあんたは死んでも守ってみせる。それに、」

「あんたに死なれちゃ、ガキどもが生きていけねえからよ」

その言葉に、ルークスは何かを感じた。

「あんたがここに来るまでは、どうしようかと思ってたんだよ。後を任せることができるやつなんていねえからな。なんせそういう奴

は全員死んじまう、かもしねえからな」

死んじまう、で言葉を終えようとしたのを、ルークスは聞き逃さなかった。

彼らは多分、わかっているのだろう。

奴らに対抗して、勝ち目などほぼゼロに等しいことに。

それでも、彼らは思いとどまらなかった。

いや、何度かは止めようと思ったかもしねない。だが、このままでは食料が底を尽きるのを分かっているのだろう。

もう、この方法しか無いと。

彼らは、そう思っているのだ。

「あ、いや、それじゃ結局あんたも巻き込んでしまうことになるのか。でも、せめて一年、あいつらを育ててやってほしい。その間なら、内の食料を使ってくれたって構わない。なんならずっとここに暮らしたっていい。お前らの人数なら、食料も足り

「嫌だ」

るだろう、と言おうとしたゴウの言葉を、ルークスが否定の言葉で遮る。

「あんただってさ、死にたいわけじゃないんだろ？」

「そりゃあ、死にたくて死ぬわけじゃねえよ。でもな、そうしねえと、

「じゃあ死なない方法を使えばいいんだよ」

「またも、言葉を遮る。」

「死なない方法？まさかあんた、このまま奴らに従えって言っんじや

「違うよ」

「さらに。」

「じゃあ何だっというん

「俺が奴らを叩きのめせばいいんだよ」

「さらに、言葉を遮る。」

そしてその言葉は、ゴウは予想しなかった答えだった。

予想など、出来るはずもない。

たまたまこの村に流れ着いた少年が、奴らと戦うと言い出すなど、漫画を読みすぎている子供でもないと考えないだろう。

「何を言ってるんだ！あんたは奴の強さを知らないからそんなことが言えるんだ！」

「知らないからこそ、戦えるんだよ。どんだけ強いかを知らないから、怯むことなく戦える」

「そんなの屁理屈だ！」

「いいから任せとけて」

このおっさんがここまで声を荒らげたのは初めて聞いたな、と思いつつ、昨日会ったばかりだから聞くはずもねえか

「てか、昨日会ったばかりだから聞くはずもねえか」

「何を言ってるんだ？」

「いや、ただの独り言さ。それよりそいつらはいつ来るんだ？早く話を進めねえと、読んでる人が飽きちゃうからな」

「？ 奴らならもうすぐ来るころだから」

あんたは早く隠れてろ、と言おうとしたところに、ドン！！という巨人が太鼓をおもいきりたたいたような轟音が響いた。

その音に、村人全員が持っていた爆弾の木箱を持って決められている場所に置きに行くかのように走り出す。

それを聞き、ルークスは不敵に笑う。

「もうすぐ来るころだから、じゃなくて今来るころの方が正しかったな」

そう言っつて、ルークスは足元に置いてあった（酒でも飲まされたあとに振り回したのだろうか。だとしたら自分はかなり大変なことをしてしまったのではないか、と思いつつ）剣を持って、音のした方へと力強い歩みで向かう。

ゴウは、村人たちは、ルークスを止めようとしたが、彼らの体は動かなかった。

それは、恐怖から来るものではなく、一種の安心によるものだった。

彼らから見たルークスの背中、何故かいつそう大きく見え、
こいつならやってくれる』と、思わせる程に大きく見えた。

ルークスが向かった先には、二十人ほどの男が待ち構えていた。
「あん？お前、村のやつじゃねえな。何であいつらが迎えに来ねえんだ？」

「めんどくせえからだだよ」先頭に立っている男の言葉に、ルークスは不敵に笑いながら答える。

おそらく、その先頭に立っている男がドーマンだろう。大柄で背が高く、2mは越えている。右手に持つ銀色の銃も、その男に合わせてか1m以上の物だ。後ろにいる手下らしき奴らも、拳銃を腰のホルスターに入れている。

（多分、近づかれてもいいようにナイフか何かを持っているだろうな）

冷静に分析できている自分に多少驚きながら（剣を持っていたと言われた時点から思っていたが、もしかしたら自分はこれまでに戦闘経験があるのかもしれない）、威勢のいい声でドーマンに言う。

「だから、俺が直々に迎えに来てやったぜ！出血大サービスだ！感謝しやがれ！！」

「言ってることはよくわかんねえーが、要するにあれだ、盗賊団『滅却誤字』の盗賊団長、ドーマン様に殺されたいってことだな？」

額にしわを寄せたドーマンが銃を強く握る。

ルークスは身を屈め、

「ちょっと違うな。殺されるのは、」

「あんだだ」

と同時に剣を右に構えて全力で走り出す。

それを確認してから、ドーマンがその銃から二回銃声を轟かせる。ルークスはそれに対して走りながら剣を盾にするように構える。

放たれた銃弾は、ルークスの剣に受け止められ、弾かれる。

だが、あまりの衝撃にルークスはバランスを崩す。

そこに、もう一発の銃弾が放たれる。次を受ければ、自分はそのまま転倒し、もう一発撃たれて死ぬだろう。そう判断したルークスは、体重を右に傾けそのまま横に転がって撃たれた弾をよける。そしてそのまま一回転すると同時に停止、同時に走り出す。

「めんどくせえ。行け、てめえら！」

ドーマンの合図に、手下がそれぞれ斧やナイフを取り出し、片手で構えたままルークスに向かって走り出し、拳銃の引き金を引く。

ルークスはさつきと同じように剣を盾にする。さつきと違い、拳銃の弾はルークスのバランスを崩すことなく弾かれる。もともと巨大な剣を軽々と持ち上げる力があるルークスだ。同じように巨大な銃の球でもないとバランスを崩すことはできない。もっとも、戦車の大砲なんかを防ごうと思えば剣ごと木っ端みじんになることは間違いないだろうが。

お互いの距離が近づくと、手下たちはそれぞれの武器を思い切り振り下ろす。それに対してルークスは驚くことなく、斜めに剣を薙ぐ。振られた剣は、彼らの剣を弾き飛ばし、そのまま五人ほどの手下の身体を切り裂いた。他の手下は、一瞬で肉塊へと変わった仲間の姿に、一瞬動きを止める。その間に、ルークスは横にいる手下を無視して進み、前にいる邪魔な手下を跳び蹴りで吹っ飛ばす。飛ばされた五人ほどの手下の内の一人在りいい具合に着地地点まで飛んでいき、ルークスはその手下の上うまく着地する。そしてそのまま下にいる手下の身体を蹴り、前進を再開する。踏まれた手下以外は意識があり、また蹴られなかった手下たちも我に返り、ルークスの方を向く。

だが、彼らにルークスを撃つことはできなかった。ルークスがドーマンの方に走っているからだ。下手に外そうものなら、ドーマンに当たるかもしれない。仕方なく彼らは、銃を捨て斧やこん棒を持ってルークスに襲いかかる。だが、剣を持っているにもかかわらず

「・・・ホントに行くのか？」

村の出口に立つルークスに、ゴウが言う。彼の後ろには、ルークスを見送ろうと全ての村人が集まっていた。

「ああ。これ以上世話にはなれねえしな」

「でもよ、金はどうするんだ？」

それなら大丈夫、とルークスはタキシードの右ポケットから革でできた財布を取り出す。「ドーマンの上半身のポケットに入ってた。これも誰かから盗ったものなんだろうが、どうせ誰のかもわからないからいいだろ？金は天下の回り物って言うしな」

今俺に回ってきたんだよ、とルークスは歯を見せて明るく笑う。

「使い方、少し間違ってるぞ」

「気にすんなよ。じゃ、そろそろ行くわ」

ルークスは、くるりと後ろを向き、歩き出す。

「ルークス！」

後ろから聞こえた声に首だけ後ろを向ける。

声の主は、昨日自分を見つけた、レンだった。

「何かあったら、いつでもここに来ていいからね！」

子供らしい素直な言葉に、ルークスは優しく笑って返す。

「・・・おう！」

そう言っただけを向きなおし、再び歩き始めたルークスに、こんどは誰も言葉を発しなかった。ただただ黙って、見送ることにした。

小さくなっていくルークスを見送るゴウに、レンが話しかける。

「昨日家にある本を読んで見つけたんだけどね、ルークスっていう

言葉には意味があるって知ってた？」

「いや、知らないな。どっという意味なんだ？」

その問いに、レンは嬉しそうに答える。

「あのね、ルークスって言うのはラテン語で、

「『光』っていう意味なんだよ！」

とある男の旅物語

第一章「始」

終

第二章

そこは、荒れ果てた荒野だった。

見渡しても、木や草などの緑は一切なく、枯れ果てた木や特に何の意味もない岩しか見えなかった。

30分くらい前までは見渡す限りの草原だったのに、と、巨大な剣を背負った黒いタキシード姿の少年が顔をしかめる。

彼の名は、ルークス。

これまでの記憶を一切切持たない、一人の旅人である。

と言っても、正式に『旅人』となつたのはつい4時間ほど前である。彼は、とある村近くにある海に流れ着いていた所を村人に発見され、見つけた村人たちに保護された。

その後一騒動あり、村を出ることを決心し、今に至る。

村を出て旅をしようと思つたのは、別に自分の記憶を探しに行くためではない。確かに自分の過去は気になるが、外に出たからといって自分の記憶が戻るわけでもない。それなら、無理に探さなくても今を楽しんだ方が良くと彼は考えた。

それに何より、いつまでも村人達の世話になるわけにはいかないと、彼は思つた。

彼らは、特に食糧に困っているという風ではなかったが、それも無限にあるわけではない。

村には、まだ幼い子どもたちもいた。

自分の為に一人分の食糧を使うくらいなら、それを分けて子どもたちあげたほうが、あの子らも喜ぶと思つた（実際には、子どもたちはルークスが村に残ることを望んでいたのだが）。

そして村を出て、4時間ほど歩き続けて、ルークスは独り呟く。

「いつまでこの景色が続くんだ・・・」

さつきから、渴いた地面と枯れ果てた木しか見ていない。

それまでは、何時間も草原が続き、同じことを言っていたのだが、

あれはまだ色があるだけ良かった。

淡白な色が続いてる道を歩き続けて、まだ1時間も経っていないのだが、もう4時間はこの景色を見ている気がする。

「もう退屈で死にそうだ・・・」

同じく草原でも言っていたことを繰り返すルークスの視界に、さっきから続いている景色とは違うものが写った。

「うん？」

ここから見れば、ただの黒い塊にしか見えないが、近づいてみると少しずつ影が大きくなっていき、それが小さめのトラックであることに気付いた。

「何でこんな所に・・・？」

そう、ここは荒野のと真ん中だ。

どこかに向かっていると言うならまだしも、トラックはまったく動かず、まるでタイヤが地面と一体化したかのように止まっている。

ルークスがトラックがはつきりと見える距離まで近づいて、また一つ異常に気付く。

そのトラックからは、まったく人の気配がしなかった。

ルークスは、トラックの後ろのドアが開いていることに気づき、失礼を承知で中を覗いてみた。

そこには、7歳前後の二人の少年と少女がいた。

ただ彼らは、

真つ青な顔をして、死んでいた。

とある男の旅物語

第二章

『影』

「何だ、これ……」

ルークスの口から出た言葉に、答える者はいない。

「何なんだよ、これ……！」

二人の顔を見る限り、相当苦しんで死んだのだろう。

首を絞められて殺されたのか、あるいは毒ガスでも吸わされたのか、とにかく自殺ではないだろう。

もし自殺なら、もっと楽に死ぬ方法を選ぶはずだ。

いや、それよりも、

二人の子どもは縄で足首を縛られていた。両手が後ろにまわされているが、おそらく同じように縛られているだろう。

逃げるこのできないように。

「……………」

二人分の死体を見て、ルークスは考える。

一体、誰がこんな幼い子どもを殺したのか。何故殺したのか。そもそも、この子達の親はどうしたのか。

「……………そうだ！」

この子達の両親は！？

ルークスは、子どもたちを見て、一瞬申し訳なさそうに顔を歪ませ、ドアを閉めた。その後、彼は子どもたちの両親がいるであろう運転席へと向かう。

人気がない時点でわかってはいたが、やはり両親も死んでいた。同じように、顔の色を青く変色させて。

大人は力が強いと判断したためか、彼らは体全体を自らが座る椅子に縛り付けられている。

「……………くそ野郎が」

ルークスは、おそらくもう近くにはいないであろう、この一家を殺した犯人に向けて毒づく。

「お？なあ、あんた」

その言葉に応えるように、男の声が聞こえた。

声をした方を向くと、ルークスと同一年くらいの男が立っていた。黒を基本として、所々に赤色や金色のラインがかかった制服のような物を着て、栗色の髪をしたその男は、背中にルークスの持っている剣とさほど変わらない大きさの大剣を2つ、背中の真ん中でクロスするように背負っていた。

「おお、やっぱりか。いや、探したぜ」

大袈裟なジェスチャーを交えて、男が言う。

「いや、あつちにある町で訊いてみようかと思っただけで、まさかこんなに早く見つかるとは思わなかったぜ」

そう言つて男の指差す方向を見れば、歪に並んだ2つの木を見つかる。

右側は2 m程の木が、左側は1 mあるかないかくらいの木が生えていて、間に人一人入れるくらいのスペースがある。

ルークスは哀れな視線を男に向けながら、

「なあ、あれは町じゃないぜ。あれはな、木って言ふんだ」と、懇切丁寧に教えてやるが、男の反応は、

「違えよ！そつちの方向に町があるつつてんだよ！！」

と、またも大袈裟に身ぶり手振りを加えて少々怒鳴り気味に言う。

「あ、そうなのか？じゃ、俺はその町に行くから、あんたはこのトラックに入つてる死体を埋めてやってくれ」

「ああ、任せろ。墓は綺麗な海が見える所に造つてやる、つて、だから違つつてんだろうが！！」

盛大なノリつっこみだった。

「俺はお前によろがあつて来たんだよ！つて、そのトラックにいる奴ら、死んでるのか？」

「ああ」

「お前が殺つたのか？」

「ああ。つていや違つ」

危うく殺人犯になるところだった。

「そうか。そりゃご愁傷様だな」

男は右手を軽く振りながら言う。

「じゃ、俺は俺の目的を果たすか」

「目的？」

少し真剣な顔つきになった男に、ルークスが反芻する。

「ああ、お前に訊く。戻つて来んのか、来ないのか。どつちだ？」

その言葉に、ルークスは目を見開く。

「お前、俺を知つてんのか？」

「ああ？何言つてんだ？」

男は当たり前のことを訊くな、という様に、大きなジェスチャーをしながら頭上に『？』マークを浮かばせる。

「ああ、お前、逃げるために、んなこと言つてんだな？」

男は納得納得、という様に大袈裟に握りこぶしで手のひらを叩く。

「は？いや、俺はホントに

「おっと、勘違いすんなよ」

ルークスの言葉を遮り、男は大きく両手を広げる。

「今のはお前に言い訳をさせるために言つたんじゃねえ。俺個人が納得するために言つたんだ」

「どうやら、男はルークスが逃げるために自分を混乱させようと、『記憶がないフリ』をしていると思つていらしい。

「いや、俺は

「ああああ、もういい。これ以上は時間の無駄だ。俺はお前が戻る気がないとして、お前を大胆不敵迅速華麗に抹殺する」

「またもルークスの言葉を遮り、背中の2本の剣に手をかける。

「いや、だから

「問答無用、先手必勝！！」

再びルークスの言葉を遮ると同時、男は剣を抜き、ルークスに斬りつけた。

お互いにお互いの剣を打ち合いながら、ルークスは考える。

最初の一撃はとっさに剣で防ぐことで、己の体が4等分されるのを免れたが、一撃一撃の重さはルークスと大して変わらない。

そして、重さは速さでもある。

あの時、ルークスが少しでも反応が遅れていたら、もし間に合つて

いたとしても剣の構え方を間違えていれば、彼の体は2本の大剣によつて斬り裂かれていた。

そして、たった一回防いだ所で、数の差は埋めきれない。たった一本の剣が有るか無いかの違いだが、その一本で勝敗が決することなど珍しくもない。

例えば、最速の重さで2本同時に剣を振るわれれば、同じように最速の守りで迎え撃たない限り、守ることはできない。そして、この攻撃の強みは、数だけではない。

この攻撃は、2本同時というだけでなく、攻撃の重さの要である速さも伴っている。

つまりは、相手に避けるべきか受けるべきかの判断を焦らせるのである。

そしてその制限時間は、常人にとっては正しく『一瞬』に等しい。

その期間を『一瞬』と感じない者にとつても、短いことに変わりはない。

事実、ルークスは焦っていた。

(くそつ、冷静に考えても、段々頭が追い付かなくなって来やがる……！)

冷静になろうとしつつも、少しずつ、しかし確実に焦ってきている自分に気付き、ルークスは心の中で舌打ちする。

(このままじゃ、負ける……！)

少しずつ彼にとつての『判断期間』は短くなっていき、それが0になった時が、彼が2つの剣に斬り裂かれるときだ。

そう思ったのと同時、目の前の男は突然左手の剣を前方に投げる。

それは元からルークスを狙ってなかったのか、彼は首を少し曲げるだけで避けることに成功する。

ルークスの後ろで剣が地面に刺さる音を聞き、男が地面を蹴り、ルークスに斬りかかる。

元が重い斬撃に、更に己の体重を乗せた攻撃を、同じように剣を構えて防ぐ。

だが、男の剣は、ルークスの剣を掠めただけで、そのままルークスを通り過ぎた。

「……………!!」

そこで、ルークスはこの男が剣を投げた理由を理解した。

男は勢いをつけたまま自分の投げた剣に向かう。そして、男は体を半回転させ、投げた剣に垂直に着地する。そのまま刺さっている剣を蹴り、一瞬遅れて刺さっている剣を引き抜く。

2つの剣を軽々と振り回す腕力に、全体重を乗せた攻撃に、さらに勢いのかかった最速で最大の一撃に、ルークスは一瞬だけどうするべきか迷う。

受けようと思えば一回目の攻撃で剣を弾かれ、二回目で身体を斬り裂かれる。

ならば避けるしかないが、避けるとしてどこに避けるか。前に避けるなど自分から

「さあ殺してください」と言っているようなものだ。というかそれはもう回避行動にならない。ただの自殺行為だ。

右に避けようと思えば、精一杯跳ばない限り、体の一部を失うことになる。ならば後ろはどうか。跳んで避ければ当然の様に正面からの斬撃にやられることになるが、そのまま後ろに倒れれば。

前や横に倒れるより立て直すまでの時間は長いが、相手も強烈な一撃を放っている分、隙も大きいはずだ。

そう判断したルークスは、受け身の体制で後ろに倒れる。

幸い、剣が刺さったところが離れていたため、一瞬迷ったルークスでもギリギリで避けることができた。

前髪の先が切れる感触を感じながら、ルークスは後ろに倒れる。衝撃を地面に逃がしたあと、すぐさま起き上がり、後方に向き直る。

男は、まさか避けられるとは思わなかったのか、受け身もとらず無様に地面を転がっていた。

ルークスは下手に突っ込まず、相手の出方を伺った方が良いと判断し、どう来ても対処できるように剣を斜めに構える。

だが、男はそれを気にせず、ゆっくりと立ち上がる。そして、左手で頭を押さえながら、誰に聞かせるでもなく言う。

「・・・痛つてえ・・・目が回つてすげえクラクラする・・・」

そのあまりにも無防備な姿に、ルークスは張り詰めていた緊張の糸を緩める。今彼に後ろから襲いかかるものがいたら、それが例え子供でも勝てるだろう。

「あゝ〜今回はここまでにしといてやるわ」

さも自分が譲つてやったかのような口振りに、ルークスは完全に戦う気を無くす。いや、実際に男の方が有利ではあったのだが。

「はあ？お前何言つて

「おっと、勘違いするなよ」

剣を背中に掛けながら、男はルークスの言葉を遮る。

「これは俺が負けたから逃げるんじゃない。こんなところで終わつても、面白くないからな！」

そう言つて、お約束の如く、懐から怪しい球体を取り出すと、地面に叩きつける。すると、その球体は破裂し、中から強烈な光を発する。

「!!!!!!!」

ルークスはとつさに剣で目を庇う。

光が収まり、ルークスが目を開けた頃には、男の姿は消えていた。

この広い荒野でどこに行けば姿を消せるのかと疑問に思いつつ、これからどこに行くか考える。

さつきまで進んでいた方向も、男との戦闘で分からなくなつてしまつた。

そこで、ルークスはさっきの男の言葉を思い出す。

「確か、木の方向に町が在るとか言つてたな」

ルークスは辺りを見回し、特種な生え方をしている木を見つける。

手前が短く、向こう側が長い。「ってことは、このまま左に行けば良いんだな」

ルークスは左を向こうとした所で、一家の死体があるトラックの存在を思い出し、その方向へ体を向ける。

「悪いな。もう少し早く来れたら助けることが出来たのかもしれないけど、まあ運がなかったと思って、許してくれ」

そう言つて、ルークスは今度こそ町の在るであろう方向に歩き出した。

トラックから、さらに30分ほど歩いた所に、その町は在った。

町の入り口には看板が掛けてあり、こう書いてあった。

『ようこそ、三笠へ』

【三笠】というのは、この町の名前だろう。

ルークスは町に入り、まず宿を確保するために、辺りを見回し、そこで気付く。

この町の建物は、全てが西部劇なんかに出てきそうな木製のロッジでできていた。

変わった町だな、と思いつつ、ルークスは宿の搜索を続ける。

「何か、お困りですか」

そこに、一人の男が話しかけてきた。髭を生やし、タキシードを着ているが、ルークスとは違うタイプのものだ。

「ん？あんた誰だ？」ルークスが訊くと、男はこれは失礼、と会釈をし、

「私はジム・クレイズ。しがない魔術師です」

魔術師？と、ルークスが反応する。

「はい。魔術師とは、その名の通り、魔術を使うことができ、それを広めるのを生き甲斐としている者たちです」

と言っても、不思議な力を使えるわけではありません。とジムは続ける。

「魔術というのは、単なるタネや仕掛けを準備して行く、言わば手品のような物です」

「なら、何で手品師じゃないんだ？ やってることは手品と一緒になんだろ？」

「いいえ、それを完成させるために色々仕掛けがあるのは変わりませんが、手品とは用途が違います」

「用途？ 使い方？」

「いえ、使い方と言うより使う対象のことです。手品は人に見せるためにありますが、魔術は」

少し溜めてから、ニヤリと笑い、

「人を攻撃するためにあります」

その言葉に、ルークスは少し顔を険しくする。

「人を殺すためには勿論、人を動けなくしたり、一部だけ腐らせた。あからさまな武器を使わなければ魔術師なのです」

「じゃあ、広めるってのは、人殺しの方法を広めるってことか？」

その率直な質問に、ジムは躊躇うことなく肯定する。

「まあ、安心してください。私はもう魔術を広めたりはしませんよ」

「何で？」

「広めたくないからですよ」

ジムの言葉に、ルークスは一種の覚悟のようなものを感じる。

「これは、誰かに教えて良いものじゃない。教えては、いけない」

真剣な顔付きのジムに、ルークスはこの話はこれ以上続けるべきではないと判断し、

「そっぴゃ、何の用だ？」

ジムは、ああ、そっぴゃと、表情を緩める。

「先ほど、あなたが辺りを見回しているのを見つけまして。何かお力になればと」

「ああ、実はさっきこの町に来たばかりで、宿を探してんだけど」

「おや、あなたは旅の人でしたか。てつきり町の人かと」

「こんな変わった服町の人は着ないだろ」

「確かに、変わった服は変わった人しか着ませんね。私とあなたのような」

「違う、と二人は笑い合う。」

「いや、実は私も今日この町に来たばかりでね、良ければ色々お話を伺いたいのですが。先ほど、宿を見つけましたので、そこで話しましょう」

ルークスはそれに賛成し、ジムの向かう先についていった。

「記憶喪失、ですか」

宿は二階建てになっていて（勿論宿も木製ロツジだ）、二階が旅人や観光客を泊める宿で、一階は食堂になっており、ルークスたちはそこで夕食をとりながら話していた。

「ああ。いやホントに困った。何か目覚めたらタキシード着てるわ剣持ってるわで」

「名前は憶えてないのですか？」

「いや、名前は憶えてるよ。まだ名乗ってなかったかな。俺はルークス。ルークス「ハイド」その言葉に、ジムは目を見開いた。

「ハイド？」

「うん？何か知ってるのか？」

ルークスの言葉に、ジムは表情を戻し、

「ああいえ、変わったお名前だなと」

「何かそれ、俺に失礼じゃね？」

「いや、素敵なお名前ですよ」

なんとなく納得いかないといった顔のルークスに、ジムが【日本】地図を取り出す。

「ここから北西に数km行った所に、【椿】という街があります。私はあなたの力になれませんが、ここなら大きい街ですので、何か手がかりが掴めるかもしれません。ここには岬大陸東側を走るバスがありますので、それに乗ることをお勧めします」

「そうか、ありがとう。いや、悪いな、世話になって」

「いえいえ。私はあまり人助けはしないタチなのですが、たまにしかなくなる時もありますね。偶然それが今日だったというだけですよ」

なにしろ私も旅をしているのでね、あまり人助けをする余裕はないのです、と付け加えるジムに、

「そっぴゃ、あんたも今日この町に来たって言ってたな。あんたは何で旅してるんだ？魔術つてのを広めるためじゃないんだろ？」

「ええ。私が旅をしているのは、色んな人に会いたいからですよ。人というのは面白い。見た目は似ているのに、言うことは皆違う。皆、違う反応をする。そういう人によって違うコミュニケーションを楽しむために私は旅をしているのですよ」

「・・・なるほど」

そういう楽しみ方もあるのか、とルークスは頷く。

「さて、明日のバスは朝から出ますし、もう御休みになつては如何です？」

「あんたは？」

「私はもつとこの町を知りたいので、もう少し起きていますよ」

「そうか、じゃ、俺は寝るわ」

料理を食べ終わったことをウェイターに知らせると、すぐに皿を回収しに来た。

「ええ、お休みなさい」

ルークスは階段を昇ろうとして、そこでジムに

「ああ、そうそう」と呼び止められる。

「明日は早く起きた方が良いでしょう。バスのこともありますが、もしかしたら寝覚めが悪くなるかもしれませんので」

「?ここで何かのイベントでもあるのか?」

「まあ、そんなところですよ」

「そっか。じゃあ、早めに起きるように努力するわ」

「はい。お休みなさい」

階段を昇っていくルークスの背中に、ジムが声をかけたが、ルークスには聞こえなかった。

ルークスは、鍵に書いてあるのと同じ『012』の部屋に入り、ベッドに飛び込む。

今日は色々なことがあって疲れたためか(朝の盗賊騒動とか、長い道のりとか)、睡魔は一気に襲いかかってきた。薄れゆく意識の中で、ルークスは昼にあった男を思い出す。

『お前に訊く。戻って来るのか、来ないのか』

(あいつ、俺を知ってるみたいだったな・・・)

一体あいつは、俺は誰なんだ・・・?

そう思ったところで、ルークスの意識は完全に暗闇の中へと沈んでいった。

窓から入る光で、ルークスは目を覚ました。

時間はわからないが、まだ陽が昇りきってないところをみるに、結

構早めに起きたようだ。
階段を降りて一階に行くと、ルークスよりも早く起きた宿泊客が数人、朝食を取っていた。
それを見てルークスの腹が唸りだしたので、ルークスは苦笑しながらウェイターを呼んだ。

入り口付近に『飯宿玉子』と書かれた看板が置いてある建物から数m離れたところに、タキシードを来た男が立っていた。
その男の顔は、醜く歪んでいた。

朝食を終え、宿屋を出たところで、こちらを見ているジムを見つける。

「どうも、御早うございます」

「おう、おはよう」

ルークスのまだ眠気が抜けきっていない返事に、ジムは笑いながら、「あそこに見える店には、食べ物や水などが売っています。ついでに眠気覚ましでも買っては如何です？」

それに対しルークスは、照れくさそうに笑いながら答える。

「悪いな。そうさせてもらうわ」

じゃあな、と残し、ルークスはジムの示した店に向かった。

「これとこれで、後は・・・そうだ、眠気覚ましだ」

えーっと眠気覚まし眠気覚まし・・・と棚を巡回するルークスの耳に、爽やかな朝にはそぐわない音が聞こえた。

それは、女性の悲鳴。

ルークスは持っていた食料等を落とし、急いで出口に向かう。店を出たところで、さっきの悲鳴をあげたであろう女性を見つける。他にも、同じく女性の悲鳴で駆けつけた住民などもいた。

そして、その住民も、女性も、皆同じ方向を見ていた。ルークスもそれを辿り、視線を合わせる。

そこには、いかにも毒々しい色の煙をあげた宿があった。入り口近くに『飯宿玉子』と書かれた看板が置いてある。

「!!!!!!」

数分前までは自分がいた、あの宿だった。

あの宿には、まだ寝てる人がたくさんいた。ルークスより早く朝食を取っていた人達だって、まだいるかもしれない。

(助けに行かないと!)

宿へと駆け出そうとするルークスに、

「待ちなさい」

と、声がかかった。

ルークスは振り向き、声の主がジムであることを確認する。

「行っても無駄ですよ。もう全員死んでます」

「何でんなことわかんだよ！行ってみなくちゃわかんねえだろ！」
再び走り出そうとするルークスをまたもやジムが呼び止める。

「だから、行っても無駄ですって。全員死んでます」

「だから、」

なんでわかるんだ、と言おうとしたところで、ジムが続ける。

「私が殺しましたから」

「.....は？」

目の前にある現実から目を背けるように、ルークスは言葉を頭の中で反芻する。

「それって、どういうことだ？」

わずかに眉をひそめるルークスに、ジムは呆れたように、

「全く鈍いですねえ。つまり、こういうことですよ！」

言ってジムが指を鳴らす。

それと同時に、野次馬として集まった町人たちが、次々と倒れだした。

「あ……が……！」

「なん……これ……！！！」

その光景に、ルークスは一瞬思考を停止したが、すぐに我に帰り、ジムに怒鳴り付ける。

「おい、あんた！一体この人達に何をした！！！」

ジムは笑いながら、

「何って決まってるじゃないですか。私は魔術師ですよ？彼らには毒をすってもらいました」

でも安心してください、とジムは続ける。

「これはただ脳以外を麻痺させただけです。まだ死んじやいません。こうするまではね！」

言って、ジムがもう一度指を鳴らすと、倒れた町人がさらに顔を青くして、苦しみ出す。

「さあ皆さん、断末魔でもこの世との別れでも、家族の名前でも恋人の名前でも友人の名前でも、好きに叫びなさい！！！！！」

両手を大きく広げるジムに、声にならない声で必死に命乞いする者や、誰かの名を叫ぶ者、喋れないのか、それとも喋らないのか、ただ黙って迫り来る死を待つ者、泡を吹いて気絶している者もいた。

「てめえっ、何でこんなことを……！」

「言ったでしょう！？私の旅をする理由を！全く魔術師という職業はつまらない！！魔術を教える以外に、戦争に参加することはあれど、相手にするのは精神的に訓練された敵の兵士！皆同じことしか言わない！！俺は足手まといにしかならないから置いていけ、今の戦況では不利だから無理をしても連れていけ、違うでしょう！？あなたたちは兵士である以前に人間なのです！！本能的に死を怖れる1つの種族なのです！！命乞いをしなさい、助かる方法を考えな

さい、逃げることを考えなさい、捨てることを考えなさい！そして無駄だと知りなさい、諦めずに最期まで足掻きなさい、希望を捨てなさい、希望を持ちなさい！戦況を見ず、戦場を見ず、己を見なさい！迫り来る死を見据えなさい、自分のいない世界を見通しなさい、死と言う恐怖を見つめなさい！！そこに見るあなたは、一体どんな顔をしているのでしょうか？怯えていますか、恐れていますか？笑って死にたいですか、醜く顔を歪めて死にたいですか？最期に見るのは残す家族ですか、遺した財産ですか？家族の顔ですか、友人の顔ですか、恋人の顔ですか、怖れている自分の顔ですか！？それを見るために私は旅をしているのです！

「あなたの来た方向から見るに、一台のトラックを見ましたでしょう？そこにいた子供たちはどんな顔をしていましたか？そこにいた彼らの両親はどんな顔をしていましたか？そこから彼らは死ぬ前にどんな顔をして、どんなことを言っていたと思いますか？人というのは本当に面白い。機械人形のような兵士とは違って、皆さんそれぞれ違った反応を返してくれます。全く人生は面白い、人の数ほど殺す前の楽しみを味わうことができるのですから！！！」

「おっと、私と戦う気ですか？まさかあなた、私に勝てる気でいらっしやる？」

ジムの眼をじつと睨み、剣を構える。

「ああ、勝てるさ。あんたみたいな奴は、主人公に簡単にやられると相場は決まってるんだ」

それを聞いたジムは、一瞬目を見開き、直後大声で笑う。

「そんなのは子供たちが読んでいる漫画の話ですよ。それにあなた、あなたは自分がこの世界の、【日本】という星の物語の主人公だとも言うのですか？だとしたらあなたは決定的な思い違いをしています。この世界の主人公は、あなたじゃない。ましてこの世界の王でもない。いいですか、この世界の主人公なんてのは、

「いないんですよ！！！」

その声が、そのまま戦闘開始の合図になる。

ジムはルークスに握手を求めるように右手を広げ、ルークスはジムの軸として右に走り出す。

直後、先程ルークスが居た所から緑とも紫ともつかない煙が発生した。

それを目で確認して、両手で持った剣でジムに斬りかかる。だが、それはジムが右手の平をルークスに向けると言う行為によって中断される。いや、中断させられた。

ルークスはその行為に身の危険を感じ、後ろに飛び退く。

先程と同じように、ルークスが飛び退くとほぼ同時に、どうやっていいのか毒々しい液体で作られた壁が地面から生えてきた。

「わかりましたか？あなたは私に近づくことは出来ない。それはあなたの死に繋がるからです。つまり、あなたは私に勝つことが出来ない！」

言って、開いた右手を握りしめる。

それを合図に液体の壁が崩れ、ルークスに向けて放つ矢へと形を変える。

ルークスは剣を地面に刺すように構え、液体の矢から身を守る。矢は剣にぶつかり破裂する。液体の滴は、ルークスのすぐ横を通り、ルークスの後ろに落ちる。

「ははは、どうです？手も足も出ないでしょう！？」

ジムの嘲笑を受けながら、ルークスはひとまず避けることに専念する。まっすぐ走っていても先を読まれるので、途中で避ける方向を等で、着実に避け続ける。

（くそ、どうすればあいつに勝てる！？馬鹿正直に斬りつけようとするれば、毒を喰らうだけだ！何か遠くから、遠くから攻撃する方法は！？）

そこまで考え、ルークスは1つの方法を思い付いた。（そうだ・・・！あいつは・・・！）

走っている足を緊急停止させ、最後に踏み出した右足を軸に回転し、

ジムの方に向き直る。

同時に走りだし、右手で剣を回転させる。

「おや、逃げるのを止めましたね。何か勝つ方法でも浮かんだのですか？でしたら是非とも、

教えていただきたい、という言葉は言えなかった。言う前に己の目が、ルークスによつて放たれた高速の弾丸と化した剣を捉えたからだ。

「な

言葉にする前に、剣が腹を突き刺し、ジムの身体を後方に飛ばす。

4 mほど飛んでから、ジムは自分の身体ごと地面を突き刺した剣によつて動きを封じられた。

それは即ち、ルークスの勝利を意味していた。

「いや、負けましたよ……まさかこんなに大きい剣を投げるとは思いませんでしたよ……」

腹に風穴を開けたジムが、虫の息でルークスに話しかける。

「前に俺のみたいに大きい剣を投げる奴に会つてな」

「しかし、これが恐怖ですか……死ぬかもしれないといった恐怖なら何度も味わったことがあります、絶対に死ぬとわかつている恐怖はまた違った感覚なんです……」

「……俺はそんな状況になつた『記憶がない』からわかんねえけどよ、今まで沢山の人を苦しめて殺してきたんだ。次は、

「私が苦しんで死ぬ番、ですな」

「……そういうことだ」

「ふ、ふふ、良いでしょう。この感覚もまた、面白い。今まで見たことの、感じたことのない感覚だ。私は最期のこの感覚を、精一杯楽しむことにしますよ」

「……そうか。あ、『最後』に1つ訊いていいか？」

「何です？」

段々弱まっていく声で、ジムが促す。

「【椿】って街は、どっちにあるんだっけ？」

そんなことですか、と笑いながら、ジムは街のある方向を指差す。

「あつちに、バス停がありますので、それに乗ってください。今から歩いて行けば丁度着いたところで来ますよ」

「そうか、ありがとな」

そう言つて、ルークスはジムに示された方向に歩き出した。

確かな恐怖と共に薄れ行く意識の中、ジムはルークスに聴こえないほどの声で、呟くように言った。

「いえいえ。これは、ジム、クレイズという、一人の、紳士の、『最期』の、親切、ですから・・・」

言い終わってから、ジムは声が出なくなったことを理解した。

とある男の旅物語

第二章『影』

終

第三章・1

眼を開けると、そこには二人の少年と少女がいた。

二人とも、4歳くらいの小さな子だ。その二人は、目に見えない誰かに笑いながら話しかけている。

彼は、その誰かが自分であることに気付いた。

自分を入れた三人は、どこかわからない開けた場所を走っていた。一体自分は何処に向かっているのだろう。

そう疑問に思ったが、彼が足を止めることはなかった。

わからなかったが、不安ではなかった。むしろ、このまま走り続けることが安心に繋がるような気がした。

突如、彼の視界が大きく揺れ、真つ暗な世界を映した。

彼は、自分が転倒したことを理解した。

不思議と痛みはなかった。痛みは無いのに、何故か自分の瞳から熱い何かが零れるのを感じた。

身体を起こした彼に、先程前を走っていた二人が駆け寄ってきた。

二人の子達は、困ったように、オロオロしながら、自分に何かを言っている。

何を言っているのかはわからない。ただ、自分が泣いているのをどうにかして止めようとしているのはわかった。

二人の内、女の子の方が自分に近づいてきて、視界を彼女で塞ぎ、手を視界の外へと伸ばした。

感覚はないが、彼女は多分、自分の頭を撫でているのだと思う。

頭を撫でながら、困った表情で何かを言っている。

最初、何を言っているのかはわからなかったが、段々自分の泣き声と彼女の声が聴こえてきた。

彼女は、自分の頭を撫でながら、こう言っていた。

「大丈夫か？ルークス」

「……ん……」

バスの揺れで、ルークスは目を覚ました。

何か夢を見ていた気がするが、どんな夢だったかは憶えていない。

強いて言うなら、何かピンクで球体に直接短い手足が生えたような、

何でも食べそうな巨大な怪物に追いかけられる夢だった気がする。

（あれ、何か楽しそう……）

自分の見た気がする夢を思い浮かべ、ルークスは心の中で笑う。

『次は、【椿】、【椿】です』

バスの中に響くアナウンスに、窓の外を眺める。

今走っている長い道路の向こうに、ビルが沢山建ち並ぶ街が見えてきた。

それを確認し、ルークスは降りる準備をした。

「・・・ということがあったからこそ、この【椿】があるのです」「へえ〜。いや、おもしろい話やったわ、ありがとうな」

「いえいえ、私としてはこの街を少しでも多く知ってもらいたいのですが、最近は誰も興味を持ってくれなくて、久しぶりの話し相手でしたよ。こちらこそお礼を言わせて頂きますよ」

「んな大したことしてへんって。じゃあまあ、腹減ったから俺はもう行くわ」

「はい、また気が向いたらいつでもいらしてください」

「おう」

戸を開けて出ていく男に『椿歴史博物館』の館長は、頭を下げて見送る。

そこに、黒い服を着た博物館で働く男がやって来た。

「何ですか、あの男は？」

「失礼です。お客様ですよ」

「あ、す、すいません」

慌てて頭を下げる男に、館長は少し厳しい顔つきで、

「気を付けなさい。彼は、【日本】を旅している、ジャック・ルイスという方らしいです。この街の過去に興味があつて、ここに来たのだとか」

「え、まだ18くらいの少年でしたよね？」

「全く感心なものです。事情は知りませんが、あの若さで一人旅とは。さらに歴史にも興味を持っていらっしゃる。立派なお方ですよ、彼は」

満足そうにうんうんと頷く館長に、男は

「でも、あの若さで旅は早すぎないですか？両親はどうしたのですよう？まさか、この戦争で」

「そうかもしれません。最近はまだ激しくなってきたと聞きます。いつこの街に戦火回ってくるかもわかりません。ですが、もしそうであったとしても、彼は一人で旅をしている。その強さは、我々も見習わなければなりません」

「……………」

「さあ、何をしていますのです。お客様は彼だけではないでしょう」

「あ、はい！」

そう言つて、男は慌てて博物館の奥へと姿を消した。

ルークスが椿の街に入ったのは、それとほぼ同時刻だった。

とある男の旅物語

第三章

『友』

第三章・2

「・・・ということがあったからこそ、この【椿】は存在している、というわけなのです」

「ほうほう。なるほど」

ルークスは今、椿歴史博物館で、館長から【椿】の街ができた経緯を聞いていた。

椿に着いてから、ルークスはまず昼食のために街を歩いていた（三笠で買おうとした食料はとある事情で買えなかったため）。

適当な店を見つけてそこで昼食にし、ふと外を眺めると、たまたま反対側の壁に貼ってあった博物館のポスターを見つけ、店員に道を訊いて博物館へと到着した。

そこで、『【椿】設立に携わった人達』や『椿ができるまでにこの地で使われていた道具』等の資料を見ると、この博物館の館長と名乗る男に声を掛けられ、今に至る。

「それにしても」

と、館長が話を中断する。

「今日は若者が多いことで、感心感心」

ほっほ、と笑う館長に、ルークスは疑問の表情で返す。

「は？」

「いえね、先程もあなたくらいの方がお越しになられましたね、私の話を聞いてくださったんですよ」

「俺らくらいの奴はあんまり来ないのか？」

「どころか、最近はお年寄り以外の方はあまり来られません。皆最近の機械や施設に夢中で、過去のことなど気にもしません」

私としては寂しいばかりです、と、館長は表情を落とす。

だが、すぐに表情を戻し、

「ですが、あなた達が来てくれました」。

「お年寄りの方々は、ここに展示されている資料は見て、私の話

は聞いてくれません。自分より年が下の男には聞いてはいけないという一種のプライドでも持っているのか、少しもね。

「そんな私にとって、あなた達は最高のお客様です。私の話を、最後まで聞いてくれました。御礼を言わせていただきます」

そう言われたルークスは、悪い気はしなかったが、なんだか歯がゆかった。

「いやいや、別に俺は大したことはないって。そんな話聞いたくらいでそんなに褒めるなって。照れるよ」

満更でもない表情で、ルークスは両手をブンブンと振る。

「そ、そうだ。まだ話は終わってないんだろ？出来てからはどうなつたんだ？教えてくれよ」

照れですっかり赤くなつたルークスに、館長は、

「そうですね。では、【椿】の街がここまで発展するまでの経緯をお話ししましょう」

と、更に奥の部屋へとルークスを促す。

彼はそれに従い、館長に着いていった。

時を同じくして、【椿】の街を18歳程の青年が歩いていた。

長い銀髪を後ろで結んだその男は、都会には珍しい、和服を羽織つて、腰には一本の刀を挿していた。

刀は最近各地で起こっている戦争のため、用心してる者もいるのだが（主に拳銃）、今のところこの地域は無関係なので、所持している者は少ない。

それに都会に不似合いな和服も相まって、その姿はよく目立っていた。

彼の名は、ジャック・ルイス。

とある事情で【日本】を渡り歩く、一人の旅人である。

彼は今、昼食を終え、寢床を捜すために、【椿】の中では割と小さ

めの建物が建ち並ぶ通りを歩いていった。

先日、臨時収入があつたばかりで、所持金は特に不足してなかったが、だからと言って高い宿を借りることもなかった。彼は安めの宿を探していた。

だが、昼前によつた博物館の館長から聞くに、ここ【椿】は大手会社の本社が多くあるところらしく、何処に行つても安くても悠に30000は越すところばかりだつた。

「なんやねん、おい。宿つてのはもつとこつ．．．15000くらいの物なんちゃうんか．．．？」

割とピンポイントな宿像を浮かべながら、彼は大きく溜め息をつく。と、そこに、ジャックと同じくらいこの街に馴染まない光景が彼の視界に入る。

「ん？」

ジャックがそこに見たのは、何やら黒い重装甲に身を固めた集団だつた。先頭には、白いスーツを着た男が彼らを率いている。

（何やあいつら．．．）

そこで、ジャックはもう一つの異変に気付いた。

この通りは、【椿】の中でも人通りが少ない方とはいえ、あくまで大都会【椿】の一部。並の町には負けない量の人が、北へ南へと進んでいる。なのに、

彼らは、その異変に誰一人として気付いていない。

見慣れている、という感じでもなく、まるでそこに何もなにかのよつに歩いている。

（何か怪しいな．．．）

そう思ったジャックは、彼らの後を付けようとして、そこで、

「おいちよつとお兄さん。刀なんか持つてかっこいいねえ。よかつたらその刀俺に貸してくれない？悪いようにはしないからさ」

絡まれた。

見た感じ自分と変わらないくらい若者で、おしゃれとかそういうのを超越したファッションの服装をしている、いかにも突っかつ

て来そうな若者だった。

(片付けんのに3秒くらい、騒ぎにせんようにすんのに15秒くらいか・・・)

その頃には謎の集団を見失ってしまうと判断したジャックは、彼らをつけることを断念し、まず目の前の男を気絶させることから始めた。

第三章・3

「ホンマに、いらん時に出てくんや」

そう言つて手で埃を払いながら、ジャックはさっきの若者を見下ろす。端から見ればとち狂つた若者が裏路地で寝てるようにしか見えないが、目が覚めてもしばらくは身体の痺れが取れないはずだ。

身体の表面を痛め付けないようにしたり、後遺症が残らないようにしたのは、彼なりの気遣いだった。

「どうせあいつらも今から行つてもおらんやろうしなあ」

言いながら、大通りで見た連中を思い出す。

あの装甲服を見るに、特殊警察か何かだろうか。（もしくは、軍人か・・・）

この街を見ると実感が沸かないが、今は戦時中なのだ。いつここが戦場になつても、おかしくはない。

賑やかな風景が、一瞬にして地獄絵図に変わる。それが、戦争というものだ。

（まあ、あの集団が何者にしても、怪しいことに変わりはないけどな）

これから、あの集団を探すべきか、探さないべきか・・・そう考えていると、街に乾いた音が響いた。

銃声である。

（・・・さっきの奴らか？ やっぱ警察なんかじゃなかったか）

ジャックは、気絶している男を一目だけ見て、銃声のした方へと向かった。

「いや、疲れた」

それが、照れ隠しに更なる説明を促した代償に、かなりの時間を要し、やっと博物館を出たルークスの第一声だった。

まさかあそこまで長くなるとは思っていなかったルークスは、軽率な発言をしたことを今更ながら少し後悔した。

「ま、本当に今更な話なだけだな。言っても仕方ない。それよりも、だ」

ただ聞いているだけではあまりにも報われなさすぎるので、自分のことを話し、何か知らないかと訊いてみた。

この広い世界の中で、たった一人の人間のことを知っているとは思っていなかったが、タキシードに巨大な剣を背負うと言った、奇妙な格好をしているので、聞いたことくらいはないだろうか、と思った。

それに、昨日の夜出会った、ある一人の紳士の発言。

『ハイド』という自分の苗字に、異様な反応を示した。

彼の言う通り、単に変わった名前だったからかもしれない。だが、もしあの反応に、別の意味が込められていたとしたら……。

しかし、館長の返事は至極当然なものだった。

（すみません。私にはわかりません。何しろ、私も数十年人生を生きてますからね。変わった名前の人も、変わった格好の人も、何回も見たこと、聞いたことがありますので。しかし、彼なら何か知っているかもしれません）

さりげなく失礼なことを言われた気がしたが、そのあとで他の人を紹介してくれたので何も言わなかった。

（先程話した、もう一人の少年の方が、確か、ジャック・ルイスと言いましたか。彼は【日本】各地を旅していらっしやるそうなので、もしかしたら何か知っているかもしれません。まだ日は落ちてませんが、近くにはいなくとも、この樺の街にはいるでしょう。姿が他の方とは少々違ってしているので、わかりやすい筈です。まず、銀色の長髪を後ろでくくっていて、和服を……）

「和服を着て、腰に刀を挿した男ね・・・確かに変わった、というか古臭い格好だな。でも、この広い街、そう簡単に見つかるもんかな・・・・・・・・」

ため息をついたルークスは、こうしてても意味は無いと決意し、歩き出した。

街に銃声が響いたのは、その時だった。

【日本】の中では小さくても、その中の、【鞠木】（まりぎ。日本を星として、国に当たる）ではトップクラスの街である、椿。

仕事で西へ東へ伴走している男。今週分の食料を買いに袋を持った主婦。恋人とのデートで彼女の我儘に苦笑いを浮かべている若者。いつもの光景だが、その街の一部、八方から道が伸びる、上から見ると方位を示す道具にも見えるその場所は、静寂に包まれていた。

初めは若い女の叫び声も聴こえたが、二回目の銃声でそれも止んだ。銃声が聞こえなかった人々も、騒ぎを聞きつけ、次々と集まって来ていた。

大勢の人で作られた輪の中心には、数十人の集団がいた。

その集団は、一人を除いて、黒い装甲服を着ていて、手には銃器を持っていた。

そして残る一人は、20代後半程の男で白いスーツを着て、右手に拳銃を持っていた。

白いスーツを着た男は、人々の視線を浴びながら、大声で言った。

「皆さん！今日も仕事に遊びに、東へ西へ、お疲れさまです！今日のイベントは、僭越ながらこの私が主催者を務めさせていただきます！！そこで、誠に勝手ながら、今日よりここは、我々の侵略拠点とさせていただきます！」

「おつと申し遅れました。私は、東軍第3部隊、『修羅』の第25部隊隊長、ガスト・メビルと申します。以後、お見知り置きを！！」
それまで黙っていた人々は、それを聞くや否や、それぞれに騒ぎ立てた。各々が違うことを一斉に言っているの、何が言いたいかはわからない。

ガストと名乗ったその男は、ため息をつき、もう一度空に向けて銃の引き金を引いた。

またしても、辺りは静かになる。

その様子を見て、ガストは続けた。

「私どもが何故この場所を拠点にするのかを言ってますませんでしたね。まあ、言わなくてもわかると思いますが。この街、樁は、中々に大きい街です。それ故に、沢山の資源がある。さらにその資源を求めするため、また提供しやすくするため、ここはいくつもの街の中心部に当たる。さらにそこから別の国に行くことも容易。ですから我々、『修羅』は、ここを拠点に、各地を制圧しようというわけです。ご理解頂けたでしょうか？」

それに対し、一人の男が返事をした。

「ふざけんな！いきなりやって来て、俺たちを集めて何をするかと思いきや、この街を占領するだあ！？お前らの勝手な事情で俺達の街を奪うんじゃないか！」

大声で怒鳴り付けるその男は、18、9くらいの、耳にピアスを開けた、若者だった。

「誰もてめえらなんかお呼びじゃねえんだよ！！とつと俺達の街から出ていきやがれクズどもが！！」

ガストはやれやれと首を振りながら、ため息をつく。

「まったく、近頃の若者は五月蠅いですねえ。年上に対する言葉使いもわからないのですか。それに、そんなもので我々がはいそうですかと引き下がると思ってるのですか？まったく、ヒーロー気取りもいい加減にしないと、死にますよ？」

「何言つてやがんだ！ガタガタ抜かさずに若者の怒声を無視しながら、ガストは続ける。

「それに、あなた達の街ではありません。言つたでしょう？今日からここは、

「『私達』の街です！！」その声は、自らの発した銃声によって掻き消された。今度は空ではなく、怒鳴っている若者に向けて。

若者の眉間に風穴が空き、若者は白目を剥いてその場に倒れた。

「……………！！」

直後、集まっていた人々は悲鳴をあげ、それぞれ散り散りに逃げ出した。

「おっと、逃げれると思つているのですか？」

ガストが合図すると、この場所を囲む全ての道に隠れていた兵士が立ち塞がった。無視して突破しようとする者は、銃撃によって倒れた。

残った人々は立ち止まり、ここから逃げることを諦めた。

それを黙って見ていたガストは、大声で言った。

「わかつたでしょう！？ここからは逃げられないと！準備が整うまでに外に知られてはまずいのでね！

「さあ皆さん！これから数日間、我々の捕虜になつてもらいましょーう！私は無駄な殺生は致しません。大人しくしているなら、我々の準備が整い次第、解放致しますよ。どうか、大人しく、捕虜生活を楽しんでください！それでは早速、各々我々の指示する場所へと向かつてもらいませう」ガストが兵士に指示しようとしたところで、

「ちよつと待ったあ！！」

2つの声が、街に響いた。

それは、ガストが塞いだ筈の道の内、北東、北西、2つの道から聞こえた。

そこには、タキシードを着た黒髪の少年と、和服を着た銀髪の少年が、数人の倒れた兵士の上に立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0676h/>

とある男の旅物語

2010年10月28日04時48分発行